

2024年3月24日復活前主日説教

イザヤ書 52章13 - 53章12節
フィリピの信徒への手紙 2章5 - 11節
マルコによる福音書 15章1 - 39節

聖堂の大規模改修が順調に進んでいます。予定通り復活日には完了となると思います。本日は、その復活日の一週間前、復活前主日です。復活前主日の福音書、今年はB年マルコ福音書の受難物語の部分ですが、旧約聖書、使徒書は、A年、B年、C年共通です。聖書日課で旧約と使徒書は共通となっているのは、教会として、イエス様が受難について、旧約聖書が何を指し示めしているか、そして、その教会は、イエス様の受難をどのように受け取ったらよいか、それらは共通していると考えからでしょう。

旧約日課イザヤ書は52章～53章、いわゆる苦難の僕の個所です。非常に有名な個所ですが、この苦難の僕がいったい誰なのか、いろいろな説がありますが正確には分かっていません。ただ一つ言えることは、「この人は主の前で若枝のように、乾いた地から出た根のように育った。彼には見るべき麗しさも輝きもなく、望ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、痛みの人で、病を知っていた。人々から顔を背けられるほど軽蔑され、私たちも彼を尊ばなかった」（イザヤ 53:2-3）とある通り、人間の価値観、知識や知恵では軽視され、神からも見捨てられていると思われた人物が、「多くの人の罪を担い、背く者のために執り成しをしたのは、この人であった。」（イザヤ 53:12）と、人々を救いへと導く人であったということです。

この苦難の僕に関するイザヤ書は、この大斎節において必ず読まれる個所です。また、わたしたちたちは、この苦難の僕から、イエス様のことを連想します。しかし、教会の歩みの最初から、そのような連想が当然であったわけではありません。苦難の僕という人物は、モーセやエリヤ、ダビデ王や、先週触れた大祭司メルキゼデクのように、その登場が期待されるような存在ではなかった、ましてやメシア的存在でもなかったからです。苦難の僕とイエス様が結びつくのは、イエス様の受難の出来事があるからにはほかなりません。しかし、イエス様の受難の出来事も、すべての人に最初から明確に理解されていたわけでもありません。言い換えますと、イエス様の受難の出来事と、この苦難の僕との結び付けは、相互作用の関係にあったのです。

イエス様という方、愛と不思議な力に満ちた方、メシアとも待望されたその方が、なぜ十字架にかかり、無残に死ななければならなかったのか、それを、弟子たちをはじめとして、最初にイエス様に従った人々、十字架の出来事を目撃した人々は理解することはできませんでした。聞いただけのパウロも当然理解できませんでした。しかし、イエス様の従った人々は、『聖書（旧約）』にある苦難の僕の記述を見て、イエス様のその出来事を理解したということです。それは、イエス様の十字架の出来事よりも約500年前に書かれた預言書の意味を、新たに理解することであり、その理解がさらにイエス様の出来事を深く理解させることにつながったということです。

このようなイザヤ書を代表とする預言書と、イエス様の受難の出来事との結びつけは、預言の成就という表現で理解されてきました。そのようにとらえることも大切です。しかし、単に未来を予知した予言的な文言の成就ではなく、その背景には、解釈の相互作用があるとも考えることも大切です。このような解釈の相互作用は、わたしたちが来週お祝いするイエス様の復活の意味を深めます。主なる神様は、わたしたちが気づきもしなかった方を通して、考えもしなかった出来事を通して、救いへと導いてくださること、それがイエス様の受難と復活の出来事であると気が気づかされるからです。わたしたちがこの復活前主日に全員で長い受難物語を読むのは、この無理解の初心に立ち返って、イエス様の受難を味わいためだともいえます。

使徒書のフィリピ書に、イザヤ書と受難物語をまとめるという意図はなかったと思いますが、結果として、主なる神様がイエス様を通して何を示そうとしているかを明確にしています。それは、弟子たちも人々も理解できなかった、イエス様の死に至るまでの主なる神様に対する従順さ、その従順さを主なる神様は認め、彼を「高く上げ」、彼に「あらゆる名にまさる名を、お与え」になったということです。そこに本当の愛が示された。だからこそ、イエス様を信じる人々が、イエス様を模範とするとき、この世界に愛が満ちるとういうことです。

わたしたちは、イエス様の復活の意味を理解して教会に集められています。イエス様の復活を通して、死が終わりではないことを告げられ、同時に、そこに主なる神様の深い愛が示さ、真の希望が生まれることを告げられています。そして、イエス様の登場以前も、そして登場してから二千年以上たつ今も、人と人とが争い合う出来事がなくなること、戦争のような大きな出来事だけではなく、様々な人間関係においても、人が人を苦しめるような、現象は減っていないことに気が付きます。わたしたちも教会もそのような世界に今も生きています。しかし、だからこそ、わたしたちは、イザヤ書の苦難の僕とイエス様の出来事から希望を得ることが大切なのです。苦難の僕もイエス様の出来事も、人間が気づきもしなかった方法で、救いへと導こうとされている主なる神様の愛を示しているからです。イエス様の復活をお祝いすることとは、そのような真の希望があることをお祝いすることに他なりません。

イエス様の復活を信じていても、信じる人同士の戦いは続きます。神的存在を信じるからこそ、戦いが激しくなる場合もあります。それも現実に他なりません。しかし、わたしたちは、日本という場所において、何ら脅威を感じることなく、また何ら隔てを感じることなく、今年も復活をお祝いすることができます。復活だけではなく、毎週の礼拝を捧げることができます。そのような日本にある教会であるからこそ、イエス様の復活を、大きな喜びをもってお祝いしたいと思います。ことに今年は、装いを新たにした聖堂を通して、大きく喜びたいと思います。その喜びを通して、戦いあうこと、奪い合うこと、憎しみ合うこと、そこに深い意味がないことを伝えていきたいと思ひます。